

東アジア茶文化比較研究：茶道と茶芸を中心として

著者	柯 一薫
発行年	2014
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7172号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00125703

氏名（本籍）	柯 一薫
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博 甲 第 7172 号
学位授与年月日	平成 26 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	東アジア茶文化比較研究—茶道と茶芸を中心として—
主 査	筑波大学教 授 Ph.D. 今 泉 容 子
副 査	筑波大学准教授 博士（学術） 平 石 典 子
副 査	筑波大学教 授 博士（宗教学） 津 城 寛 文
副 査	筑波大学教 授 博士（文学） 徳 丸 亜 木

論 文 の 要 旨

本論文の目的は、三つの地域（日本、中国、台湾）における茶道や茶芸の実態を、フィールドワークによって解明しながら、東アジアにおける茶文化の全体像を解明することである。これまでの茶文化研究では、岡倉天心の『茶の本』の普及によって、日本の茶道を中心とした研究がさかんであった。しかし、本論文では日本の茶文化を中国や台湾の茶文化と「比較」しながら、三つの茶文化の交流や融合のプロセスを解き明かそうとする。そして、東アジア茶文化の総体が浮かび上がるように工夫されている。

茶文化という膨大な広がりをもつ研究対象に取り組みながらも、本論文は客観的根拠に基づいた明確な「茶」の日・中・台の比較文化論を展開している。筆者自身が多くの茶会へ参加することによって、独自の知識を習得し、それを作法や茶器の解明や人間関係の考察に活かそうとする実践的アプローチがとられている。日本・中国・台湾の三地域で長期に渡って筆者が実施したフィールドワークが、本論文における茶文化解明の基盤になっている。

冒頭に先行研究への言及があり、本論文が取り上げる三地域における茶の交流史が要約されたあと、本論文の特徴であるフィールドワークの成果である茶会の実態が、作法や道具や茶の味などの項目ごとに解明されていく。

本論文は、以下のように8つの章で構成されている。

第1章 序論

第2章 台湾の日本植民時代の日本・台湾茶文化

第3章 家元・茶会・茶文化交流活動についての考察

第4章 茶道具に関する考察

第5章 中国における茶芸作法
第6章 台湾茶芸作法に関する考察
第7章 日本の点前と作法の総合比較
第8章 結論

第1章では、『茶の本』を著した岡倉天心の「アジアは一つ」という立場に少しの修正をほどこすべく、日本・中国・台湾といった「三つ」の茶文化を選定し、それらが交流しあいながら、また融合を遂げながら今日の東アジアにおける茶文化の総体が形成された、という本論文の立場を明らかにする。

それに続く第2章は、日本と台湾の茶文化が交流・融合を遂げた例として、日本植民地時代の台湾に日本の茶道が浸透していった実態を、先行研究がどこまで明らかにしたかを明示する。この章は、第3章以降で展開される本論文のフィールドワークのオリジナルな成果を際立たせる役割を果たしている。言い換えれば、どこまでが先行研究の成果であり、どこからが本論文のオリジナリティであるかが、明確に示されるのである。

第3章と第4章には、三地域の多数の茶会に参加した実地調査から得られた発見や知識が論述されている。まず、第3章では、筆者が参加した台湾の茶会の実例が、多数の写真（筆者撮影）とともに提示され、茶道具の置きかたや人間たちの座りかたなどに付与された「意味」が解き明かされていく。「相手にお礼の気持ちを求めている」ことを示す茶の出しかたや、茶会のあいだは「話をしてはいけない」という作法は、人間関係の形成ではなく、「茶の味」を追求する台湾の茶会の特徴に辿り着くという理路整然とした議論が展開されている。つぎに、やはり筆者が参加した中国と日本の茶会の実例が、写真とともに詳細に分析され、作法や道具の意味が明かされていく。日本の家元制度も内部者の眼によって考察されている。

第4章は、とくに「茶道具」に焦点が絞られる。多種の細かい茶道具が、その配置方法や使用手順などに言及されながら、存在意義を考察されていく。

第5章から第7章はひとつのまとまりを成している。フィールドワークとそこから導き出される議論が均衡を保ちながら、「工夫茶（こうふちゃ）」をめぐる喫茶法の中国・台湾・日本の違いや影響関係が明らかにされていく。まず、第5章では「工夫茶」が中国の福建で起こったのち、どのような「茶館」が存在し、どのような「茶芸作法」が伝達されているかを考察している。ここでも実際の複数の茶館が現地調査され、茶芸作法の手順もコマ撮り撮影されているため、明確に理解できる。

第6章では、中国から台湾へアモイ経由で伝わり、台湾の茶文化の代表になった工夫茶について、茶会の実地調査が行われる。茶道具の意味に関する考察もなされ、前章の中国の場合と比較できる。

第7章は、日本における煎茶道が、中国起源の工夫茶と比較され、両者が作法において共通性をもつことが指摘される。しかし、両者の直接の交流・影響関係の有無には触れられていない。

最終章である第8章は、全体の要約であり、今後の課題として取り組みたい点が列挙されている。三つの地域に限定して考察を行った茶文化であるが、韓国・朝鮮にも視野を広げたいという希望は、とくに筆者が心に刻んでいるものであり、また有益な成果が期待できるものであろう。

1 批評

本論文は、茶文化が日本・中国・台湾という三つの地域において、どのように交流しあって変化を遂げてきたか、そして総体としてどのような「東アジアの茶文化像」を提示しているかを解明しようとした意欲作である。論文全体に多数掲載されている写真は、筆者本人が数年にわたって日本・中国・台湾の各地に出向き、閉鎖的あるいは開放的な多種多様の茶会に参加し、茶芸作法のプロセスや茶道具の配置などを（相手の許可を得たうえで）写真撮影した貴重な資料である。茶芸を深く理解するため、筆者は「茶芸師」の資格を台湾で取得し、のちに日本でも取得し、その知識と技術とネットワークを活かして本論文の中核を形成していった。そうした筆者でなければ収集できなかったであろう資料が、本論文には多数含まれていて、それだけでも価値ある成果と言えよう。

茶文化を「道具」「作法」「味」「人間関係」「環境」といった茶会を構成する要素ごとに調査し、三つの地域における各要素を比較するという地道な考察を積み重ねた結果、日本・中国・台湾における茶事の実践の共通性と相違性が明らかになっている。数年をかけたフィールドワークと収集資料の分類・統括という粘り強い作業は、大いに評価できるものである。筆者自身が多くの茶会へ参加することによって、独自の知識を習得し、それを作法や茶器の解明や人間関係の考察に活かそうとする実践的アプローチがとられている。日本・中国・台湾の三地域で長期に渡って実施されたフィールドワークが、本論文における茶文化解明の基盤になっている。ともすれば抽象論に陥りがちが「茶文化」という研究テーマを、現地調査によって集めた具体的なデータを突き付けながら、明確な「茶」の日・中・台の比較分析を展開している点、賞賛の声が大きく聞かれた。

本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。第一の問題として指摘できるのは、論文全体の構成にかかわる「茶道具」の論述方法である。第4章に「茶道具に関する考察」という独立した章があるが、その前の第2章に「茶道具から見る日本・台湾茶文化比較」という節があり、さらにほぼすべての章において（第3章、第4章、第5章、第6章、第7章）、「茶道具」の写真に掲載したうえでの記述が見られる。茶道具の並べかたや形や色など、説得力のある議論が展開しているのではあるが、あちこちに散見される「茶道具」の記述の括りかたを工夫し、全体の構成にメリハリをつけると、さらに優良な論文になったであろう。

第二の問題は、朝鮮半島における茶文化を研究対象から排除した理由が、かならずしも明らかでないこと。この点に関しては、論文の構想当初に筆者が悩んでいたのではあるが、いつしか論文視野の外に置かれることになった。「今後の課題」のなかで筆者本人が「朝鮮茶礼の視点を加えて東アジア茶文化像を理解することは今後の一つの目標である」と述べているように、それは適切で必要な方向であろう。

とはいえ、貴重な茶文化のデータを、日本・中国・台湾という三地域において収集し、それらのデータを使いこなして茶文化像の一端を明らかにした本論文の成果は、極めて優れたものであると判断される。

2 最終試験

平成26年11月10日、人文社会科学科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。